

発達特性質問紙の信頼性・妥当性の検討

林 知代
三浦 正樹

1. はじめに これまでの経緯

「精神遅滞」「身体障害」を伴わない発達に特徴を持つ子どもに注目し軽度発達障害の概念を提唱した杉山(2000)をはじめとし、2012年2月から3月にかけて実施された文部科学省の報告からも通常クラスの中に、発達の凹凸を抱えている子どもが6.5%という結果が出た。アメリカやイギリスなどでは特別支援を必要とする子どもの中に才能児、いわゆるギフティッドも含むが、日本では彼らは特別支援の対象とはなっていない。しかしへスペクトラムという考え方方が更に進めば、扱いの対象となる可能性もあり、ギフティッド支援が実現することを願っている。筆者(林)は、知能高低はあっても器質的に同質の発達特性を持つ子どもについて研究を深め、彼らに必要なアセスメントはスクリーニングに止まらず、彼らの視点から彼らが体験している世界を理解しようとするものでなければならないと感じてきた。また、発達の凹凸特性が4つの領域はほとんどの場合重複しへスペクトラムで存在すること、また、発達特性の濃淡(強弱)の視点の双方から気質の類型を考えうる可能性も、臨床の視点から必要であると思われる。こうした経緯のもと2007年以降、DSM(精神疾患診断・統計マニュアル)やICD(国際保健機構における診断基準)や、Gillberg(2002)、Szatmari(1989)の診断基準に基づき、AD、HD、AS、LD其々10問ずつ計40問の特質に関する質問紙を考案し、相談に訪れた親や教師、そして15歳以上であれば本人に実施してきた。

しかし今後、心理臨床場面のみならず発達場面や教育場面で発達障害の質問紙を広く活用できるようにするため、今回はまず、共同研究者(三浦)とともにテストの信頼性と妥当性を検討することとした。

これまで4つの特性領域の個々の特徴について検討された質問紙は提示されているが、本研究は特性の重複性という視点と程度について具体的に検討すべく、集団や人間関係に関する不適応から疲労を訴えて相談に訪れた3歳から17歳までの男女74名について、発達障害特性との関連について検討する。

また、発達障害という呼称については、発達障害スペクトラム症とした方がより臨床像のイメージを適正に表しているのではないかと思うが、その論議は次回以降にまわしたい。

2. 因子分析による検討

はじめに、質問項目の因子構造を確認するために、オリジナルの40項目版に対して因子分析を行った(主因子法、プロマックス回転、4因子解)。

分析対象はいずれも発達特性から生じる問題や悩みを抱え心理相談所を訪れた人たちである。内訳は、男性58名、女性16名、計74名。年齢範囲は3歳~17歳である。

なお本研究の統計的解析には、IBM SPSS Statistics for Windows, Version 24 を用いた。因子分析の結果得られたそれぞれの因子負荷量は、次の通りである。（負荷量の大きい順に質問番号で示している。なお、項目内容は表を参照のこと。）

第1因子 LD 16 LD 32 LD 40 LD 28 LD 20 AD 17 LD 12 LD 4 AD 29 LD 24 AD 33
AD 5 HD 38 (13項目)

第2因子 HD 14 HD 10 HD 30 HD 6 AD 25 HD 2 HD 18 AS 39 AD 9 (9項目)

第3因子 AS 11 AS 19 AS 23 AS 15 AS 7 AS 31 AS 35 LD 8 AD 21 AS 3 (10項目)

第4因子 HD 26 HD 22 AD 13 HD 34 AD 1 AD 37 AS 27 LD 36 (8項目)

第1因子はLDに負荷する項目が多くLDの因子と解釈できる。ただし、元のAD項目「忘れ物が多い」「気が散る」などの項目も入っているので、AD的側面も含めた全般的な学習面での遅れを示す因子ともみることもできる。第2因子はAD/HDに関する因子と思われる。とくに多動性・衝動性に関する項目が多いが、元のADやADに関する項目も含まれている。第3因子は10項目中8項目がASに関する項目で、AS因子と解釈できる。第4因子には、元のADが3項目、HDが3項目、ASが1項目、LDが1項目含まれる。AD項目とHD項目が含まれていることと質問内容から、ひとまず多動性・衝動性のないAD/HDと仮定される。全体としてみると、ASに関する因子は比較的よくまとまっているように思われるが、第2因子と第4因子にAD/HDに関する項目が分散し、この因子の解釈が元の質問紙の想定からするとやや難くなっている。（この結果は、臨床的にADとHDは重複するため、因子的にも分離が難しいということを示唆しているとも考えられる。）

次に、元の40項目に対する因子分析は質問紙改訂のための手段と考え、次の基準で項目を選定した。まず、AD 9 AD 21 AS 3 AS 39 LD 36 の5項目はどの因子に対しても負荷量が0.4未満なので除外した。さらに、第1因子(LD)に負荷した4項目(AD 5 AD 17 AD 29 AD 33)、第3因子(AS)に負荷したLD 8、第4因子(AD)に負荷したAS 27は、想定した因子と項目内容が異なることから除外した。また、LD 24は第1因子と第3因子、両因子に負荷しているので除外した。なお、第2因子(HD)に負荷しているAD 25はAD/HD関連項目なので残した。またHD 38は典型的な項目であり、因子的にも第1因子と第4因子に負荷しているため残した。これらは選定後の項目数のバランスを考慮した面もある。以上の選定の結果、元の質問紙項目から12項目を除外し、残りの28項目で再び因子分析を行った。

28項目で因子分析した結果を表1に示す（元の40項目からなる質問紙を40項目版、因子分析により項目選定された後のものを28項目版と称す）。第1因子はオリジナル版でHDを想定した項目が多く負荷し、項目内容からもHDの因子と考えられる。第2因子は元のLD項目からの7項目で、同じくLD因子と言えよう。第3因子は元のAD項目が3項目、HD項目が3項目である。項目内容を見るとAD/HDに関連するものが多いが、第1因子との対比を考えると、多動のないAD/HDの因子と解釈するのが妥当と思われる。なお、純粹なADを代表した因子かどうかは難しいところであり、この点は後で章を改めて考察する。なお、HD 38「整理整頓、片付けができない」はLDの第2因子にも大きく負荷していることに留意する必要がある。第4因子は7項目すべて元のAS項目から成り、AS因子と言える。

表1 因子分析の結果（28項目版）

項目	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子
HD10_不適切な状況で走り回る。高いところに上る。飛び跳ねる。	0.834	0.053	-0.289	0.168
HD14_静かに余暇を過ごすことがない。過活動的である。	0.753	-0.091	-0.002	-0.214
HD30_順番が待てない。待つことにストレス。割り込む。	0.725	-0.054	0.071	0.082
AD25_努力を必要とする活動や課題が続けられない。避ける。	0.662	0.255	-0.074	-0.009
HD6_年齢で期待される時間座っていられない。席を離れる。	0.612	-0.039	0.150	-0.109
HD2_すぐ手足をそわそわ動かしたり、体をもじもじする。	0.556	0.074	0.003	-0.210
HD18_新奇なものへ興味・関心を抱く。興味関心が次々と変わる。	0.519	0.077	0.247	0.113
LD32_言われたことを文字化できない。黒板からノートへの書き写し困難。	-0.044	0.754	0.163	0.004
LD16_読みにくい文字を書く。	0.149	0.725	0.008	-0.070
LD40_学年相応の文章題の意味を理解するのがむずかしい。	0.098	0.640	-0.021	0.155
LD12_文字を書くときに筆圧が強すぎたり弱すぎたりする。	-0.106	0.627	-0.012	0.248
LD28_理解力はあるのに、簡単な計算に時間がかかる。暗算ができない。	-0.210	0.597	-0.048	-0.116
LD4_適切な速さで本が読めない。語句や行を抜かす。	0.118	0.552	0.099	0.084
LD20_句読点がない。正しく句読点を打てない。	0.329	0.543	-0.017	-0.099
AD13_質問に早とちりや思い込みがある。	-0.234	0.232	0.700	-0.202
HD26_人が質問をする前や、質問が終わる前に出し抜けに発言する。	0.163	-0.176	0.684	0.141
HD22_集団の中で必要以上にテンションが高い状態でしゃべり続けたり行動したりする。	0.113	-0.041	0.666	0.156
HD34_人の会話やゲームに干渉して流れを中断させる。	0.329	-0.051	0.626	0.048
AD1_ケアレスミスのため、能力に見合った結果がだせない。	-0.135	0.048	0.573	-0.165
AD37_覚えていて当然のことを悪意なく忘れる。事実を違うと言い張る。	0.105	0.126	0.375	-0.057
HD38_整理整頓、片付けができない。	-0.080	0.347	0.360	-0.062
AS19_大勢の友達より少数で深く付き合う。興味関心のものに没頭する。	-0.092	-0.161	0.047	0.748
AS11_他の感情がつかみにくい。感情が表情に出ない。	-0.101	0.116	-0.192	0.665
AS35_数字や文字、絵画、音楽のいずれかもしくは複数に強い関心。	0.136	-0.118	-0.116	0.595
AS15_友人は求めるが集団は嫌い。集団に疲れる。	0.010	0.084	-0.049	0.567
AS23_人の気持ちや意図がわからない。話に加わるタイミングが分からない。	-0.141	0.012	0.362	0.518
AS31_日課や動作に決まりがある。融通が利かない。新しい変化になじむのに時間がかかる。	-0.118	0.146	0.092	0.491
AS7_動作やジェスチャーが不器用でぎこちない。	-0.015	0.279	-0.113	0.428

因子間相関は表2の通りである。

表2 28項目版因子の因子間相関

因子	1HD	2LD	3AD	4AS
1HD	1	0.004	0.327	0.168
2LD	0.004	1	0.225	0.193
3AD	0.327	0.225	1	0.315
4AS	0.168	0.193	0.315	1

信頼性係数（クロンバッックの α ）は、第1因子(HD).844、第2因子(LD).824、第3因子(AD).782、第4因子(AS).775、28項目全体で.850である。

各下位尺度の平均と標準偏差を表3に示す。各尺度の満点は21点である。ADとHDにおいて男女差があるように見えるが、統計的検定を行うといづれの下位尺度でも有意差はなかった。

表3 下位尺度毎の平均値と標準偏差

因子	男性平均±標準偏差	女性平均±標準偏差	全体平均±標準偏差
AD	7.95±5.30	5.75±5.02	7.47±5.28
HD	8.28±5.59	6.81±5.45	7.96±5.56
AS	7.48±5.39	7.63±4.16	7.51±5.12
LD	6.26±5.17	6.44±5.54	6.30±5.22

今回新たに行った因子分析の結果まとめた28項目版は、元の40項目版に比べ項目の多少の入れ替わりはあるものの、因子的まとまりは確保され、また信頼性も保証される。40項目版と28項目版では一つの因子に対する項目が入れ替わっているだけなので、当面は40項目版を使用すれば、下位得点の比較が可能である。ただし、40項目版では質問内容にわかりづらいところがあり、改訂が必要である。例えば、AS23「人の気持ちや意図がわからない。話しに加わるタイミングがわからない。」という項目は2重質問である。全体の質問について因子内容を反映させながらより簡潔にするよう表現を見直す必要があろう。また、第3因子は多動のないAD/HDと解釈されるが、よりADを反映した表現にすることも考えられる。

次の章では、いくつかの事例を取り上げ、40項目版と28項目版の下位得点を比較して、臨床像をより反映しているかを考察。28項目版の方がより臨床像を反映しているとすれば、質問紙としてより有益と判断できる。

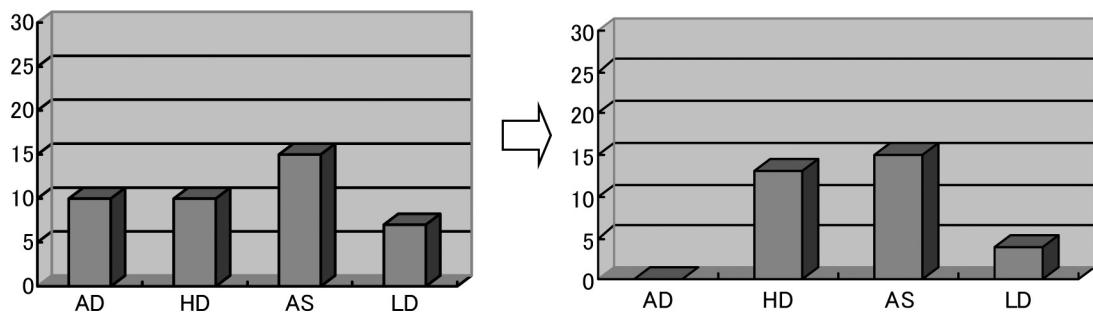
3. 事例の検討

ここでは、40項目からなるオリジナル版と28項目版を比較して特徴的な事例について考察する。28項目版の方が、得点がよりシャープに現れ、わかりやすくなっていることを示すことにもなろう。

<事例1>

特別支援学級に在籍する。発語に乏しくオウム返しが多い。特に社会的スキルの発達に遅れがあり、絵と言葉のマッチングが難しく理解していることも偏りがある。この年齢で期待される友だちとのやり取りが困難である。興味は限定され、自分の好きな動物や食べ物に限られる。毎日のように忘れ物があり、うそをつくことも多いと教師から指摘がある。

番号	性別	年齢	校種	40 AD	40 HD	40 AS	40 LD	28 AD	28 HD	28 AS	28 LD
2	3	6	小	10	10	15	7	0	13	15	4



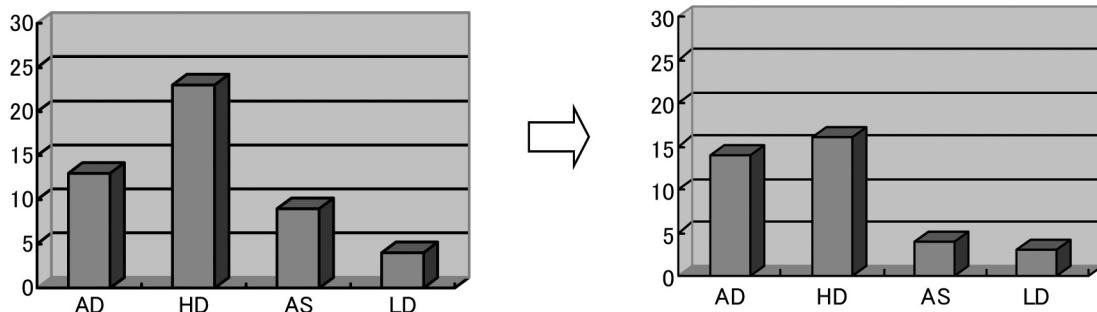
【臨床像とグラフ比較についての考察】

通常学級で生活できない程度に、特性レベルが顕在化していることを示す。40問質問紙では、AD特性がHDと同等であるが、28問質問紙では、AD特性が消失しHD特性得点が増えている。AS特性については興味の限局性や他者との相互的関わりなど、本児が支援を必要とする点が明らかになっている。毎日のように忘れ物をする点については、28問ADが0となっていることとHDが高くなっていることから、その理由は注意が散漫、集中力が持続しない、ワーキングメモリとの関連などの可能性が考えられる。

<事例2>

設定保育の内容や知的学習に関する事を覚えるのは得意だが、箸が上手に使えないとか、よく転げる。テンションが高く、また動きも突進してくる感じで大人がかろうじて踏ん張って支えるほど非常に勢いがよい。少しでもきつい(強い)口調で言われると、参観中でも何處でも寝転がって何もしなくなる。良く喋るが、相手によって気持ちをすぐに言葉にすることが出来ない。言葉を間違って覚えていることが多い。事前に伝えていたがプールに入れなかったと言う事で機嫌を悪くし、給食時間に机の上に登ったり、コップなどをカバンと机にぶつけたり、友達を叩いたりし始め、それを注意されどんどん拗ねていくことがあった。

番号	性別	年齢	校種	40 AD	40 HD	40 AS	40 LD	28 AD	28 HD	28 AS	28 LD
43	1	5	幼	13	23	9	4	14	16	4	3



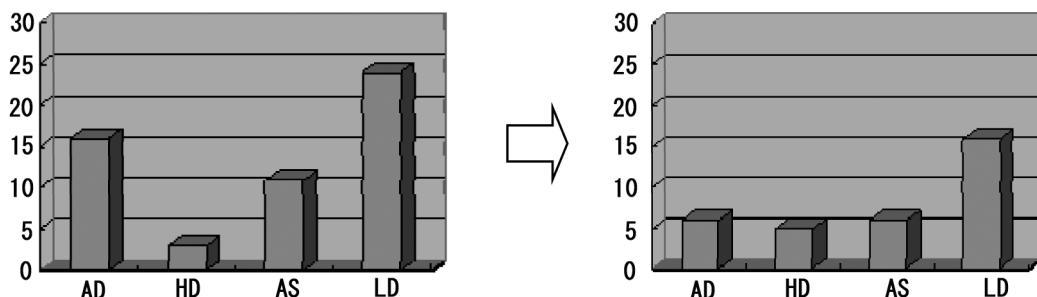
【臨床像とグラフ比較についての考察】

40 問質問では HD が飛びぬけて強く出た。しかし臨床像から知的能力に偏りがある事が窺われる。行動に自己調整の能力、つまり適度な力加減がわからない AS 特性と重なり、外見上 HD 優位が強く印象付けられたことが考えられるが、わずかの刺激にも圧倒されてしまう、よくあちこちよくぶつかる、情報処理が遅いので、本当の知能・能力より低くみられがち、などに該当する AD 特性であるが背景に大きく存在しコントール不能の上に前庭感覚のバランスの悪さなどで意思と身体活動の不一致感による疲労も考えねばならない。相手によって気持ちをすぐに言葉にすることが出来ないことや注意されどんどん拗ねていく心理背景に、理解できても身体コントロールが上手くできないことのものどかしや、疲労が存在するがそれを表現できない状態があると思われる。

<事例 3>

整理整頓ができず服も脱ぎ散らかしたままで注意しても直らない。直ぐに暴言を吐き、手や足が出る。叱られても相手が悪いと言ってきかない。学校では周りの状況を考えたり、友だちを思いやることが出来ないと言われる。そのことが理由でクラスメートから嫌がられてしまう。

番号	性別	年齢	校種	40 AD	40 HD	40 AS	40 LD	28 AD	28 HD	28 AS	28 LD
6	3	6	小	16	3	11	24	6	5	6	16



【臨床像とグラフ比較についての考察】

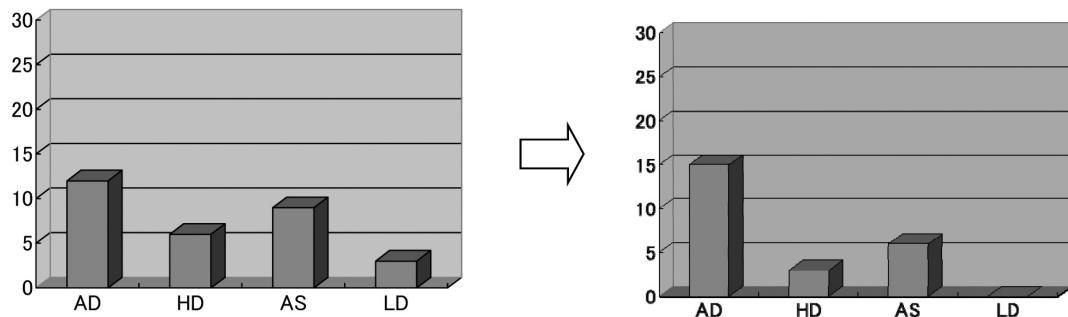
40 問質問紙も 28 問質問紙も LD 項目が非常に高くなっている。クラスでの状況を想像すると、学習へのモチベーションを促す環境とは言い難いことや、叱られても相手が悪いと言い張るのが何に対して自分が非難されるかの理解が出来ない可能性考えられる。整理整頓ができず服も脱ぎ散らかしたままで注意しても直らない点は AD 特性が作用していると考えると、本児が出来る速度とレベルに配慮される必要がある。結果、暴言手や足が出る頻度を下げ、気持ちを安定させ自尊感情を育てる必要あるだろう。周りの状況を考えられない点や、友だちを思いやることが出来ない点などを総合すると、AD と AS が同じ程度に優位で攻撃性と HD の関連を可能性として考える視点を持つことも、本児へのサポートとして大事になると思われる。

<事例4>

1 つのことに興味を示すと周りが見えない。例えば、休み時間に泥団子を作り始めると、チャイムが鳴ろうが呼ばれようが教室に入らない。作った団子は自分の机の上において、自分世界に浸っている。身の回りのものが常に散乱して片付けられない。集団行動が難しい。体育や生活科の授業などの外での学習時は、自分の興味のあることしかできず、集団から離れて過ごすことが多い。

番号	性別	年齢	校種	40 AD	40 HD	40 AS	40 LD
9	1	8	小	12	6	9	3

28 AD	28 HD	28 AS	28 LD
15	3	6	0



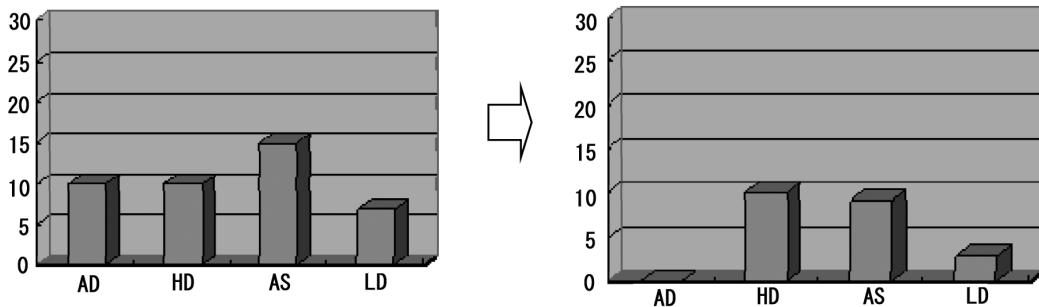
【臨床像とグラフ比較についての考察】

臨床像からも HD 特性の衝動・多動性優位の印象は無いが、その反面 1 つのことに興味を示すと周りが見えない、つまり一度に 2 つ以上の作業が難しいことから AD 特性が強いことがわかる。チャイムが鳴っても教室に入らないという点で AS なら言われていることは分かっていても終わり切るまでは動かないということになるが、本児の場合呼ばれても耳に入っていない可能性がある。作った団子を自分の机の上に置いて夢想指定様子は、AS というより AD の特性が起因していると推察できる。40 質問では AD が高いが AS とさほど程度の差は見られないが、28 質問の場合はより AD 特性が目立ってたくなっており、本児の臨床像としては、AS の集団行動が難しいという点が、より自分世界に浸ることによって結果的にそのようになっている可能性もあるとも推察できるのである。

<事例5>

話を聴いていても、集中できずにすぐ手遊びが始まる。人の話には気が散りやすいが、自宅でラジコンカーの組み立てなど、好きな事にはすごく集中する。教科書や文具を丁寧に扱えず、破れたり壊れたりすることが多い。名札や学用品など、物を失くすことが多い。実際は机の中にあったりするが見つけられない。

番号	性別	年齢	校種	40 AD	40 HD	40 AS	40 LD	28 AD	28 HD	28 AS	28 LD
10	3	7	小	7	7	11	3	0	10	9	3



【臨床像とグラフ比較についての考察】

手遊びは関心のない話を聴きその場に居続けなければならない為に何とか気持ちの調整を図る方法でことがわかる。そうした面と好きな事にはすごく集中する面が AS 特性として 40 間質問の場合も 28 間質問の場合も現れている。注目すべきは AD が 28 間質問では 0 となり HD が最も高くなつた点である。教科書や文具を丁寧に扱えず、破れたり壊れたりすることが多い。名札や学用品など、物を失くすことが多い。実際は机の中にあったりするが見つけられない。

4. AD と HD について

4-1. 問題提起

これまでの諸調査研究を始め DSMにおいても AD と HD については AD/HD というように、同質のくくりで考えられてきた流れがある。こうした経緯があることも、当初の 40 間質問紙で妥当性と信頼性において、AD と HD の因子がうまく分離できない、という問題点が生じた理由であると考えられる。しかし、筆者が臨床の場で見るクライアントは AD 優位の場合と HD 優位の場合では、臨床像が全く異なる印象を受けることから、少なくともクライアントを主体とした関わりを重要と考える臨床においては AD と HD の特性を区別して考える必要があると思われる。Soden(1995)の AD 特性を基に AD と HD の相違を明確にすると、その臨床像の違いは以下のようになる。AD と HD の項目に関する理論的考察並びに証左は、今後の質問紙内容見直しに關係する。

4-2. AD 特性と HD 特性の違い

AD も HD も活動レベルや覚醒レベルに問題がある点で共通するが、両者の違いを活動量レベルと注意力

のレベル、そして衝動性のレベルの観点から比較する。まず活動量レベルにおいては、HD は極端にそのレベルが高く、一方 AD は極端に低いということが言えよう。落ち着きがなく、衝動的に行動する傾向があり、絶えず動いていないと却って落ち着かないタイプと、動作もどちらかというと遅く活動量が少なく、じつとしていても耐えられるタイプの違いともいえる。2 つ目に注意力レベルにおいて最も異なる点は、HD は外界刺激に行動が影響を受け、注意力散漫に映る。注意の対象も絶えず変わり注意を抑えられない。一方同じく注意力に問題があったとしても、AD は、ぼんやりとして見える。自分の世界に沈んでいることが多い。作業も 1 度に 1 つがよい。3 つ目に衝動性の違いがある。HD は考える前に行動してしまう。衝動に駆られて突っ走るということが起きる。一方 AD では、外からは目立たないものの、やりかけていることを途中で別も事に気を取られ忘れてしまうという形をとる。

4-3 AD の特徴

AD の特徴は、環境因でよく似た反応が出たり HD や AS ともよく似たものがあるため早計な判断をすることはできない。しかし質問紙の目的はできるだけ臨床現場でクライアントの困り感に如何に近づくかにある。改めて AD の特徴を示すと以下のようになる (Sorden 1995, DSM-IV, ICD-10)。

- * 片付けられない。整理が苦手
- * 思いついてもなかなか実行に移せない
- * わざかの刺激にも圧倒されてしまう
- * 1 度に 1 つのことしか目を配れない
- * 情報処理が遅いので、本当の知能・能力より低くみられる
- * 1 日の終わりには非常に疲れている
- * よくあちこちよくぶつかる。いつの間にか打ち身がある
- * 待ち合わせに遅れたり、すっぽかしたりする
- * 旅行や出張で荷造るのが苦手（時間割をそろえるのが苦痛）
- * よくぼんやりしている
- * 会話の最中に自分の空想へとんでしまい、相手の言うことが上の空になる
- * 文章を読んでも要点がつかみにくい
- * 複数の仕事の優先順位をつけられない
- * 活動は受身で能動的に動くことがない
- * 締め切りぎりぎりになって動く
- * 会話の流れに関係のない話を始める

本研究では、とくに AD と HD の相違点として最も異なる活動性の特徴に注目し、項目を分類している。これまで両者の線引きが明確にされていないが、実際の臨床実践での対応や理解をいち早く適切に行うためには、困り感が目立たないために配慮を受けられないとまま疲労していくケースがあるためである。

高機能の発達障害特性を持つ場合、其々の特質が併存して見られるケースがほとんどである。AD と HD 特性をより明確に定義づけすることで臨床像を明確にし、心理アセスメントの際、特性を複合的視点から類型的に見ることを可能にする質問紙として有用性がある。類型から生得的気質としての捉え、個々の子どもに適切な養育や、青年期の自己確立の際に、より個々の生得的気質をベースにした関与に結びつけるという

考え方が、発達の偏りが即病気と直結しているのではなく前性格として捉えることが重要であろう。スペクトラムの特性の濃淡から対応も考えられなければならない問題である。

5.まとめと今後の課題

因子分析を行い信頼性と妥当性について検討した。質問項目の因子分析を行ったことにより、因子構造が明らかになった。更に、より因子構造を反映した28項目版で再分析してみた結果、28項目版のプロフィールの方が、以前の40項目版に比べ、よりシャープに出てわかりやすいという結論を得た。これまでの40項目版では質問紙から得られるプロフィールは親や教師の見立てとずれが生じていた可能性がある。例えば40項目版 AD=8 HD=8 → 28項目版 AD=4 HD=12 というような例が（本文内参照）ある。質問紙を精選（精錬）することにより、質問紙から得られた像と実際の臨床像のズレが少なくなることが期待される。40項目版は、確かに障害の重複性という点から質問紙は充分有効であったが、28項目版では、よりシャープに特性が表れる。その理由として因子構造を反映して下位尺度を組み直したためと考えられる。

40項目から28項目に下位尺度を精選することにより、実態（クライエントの臨床像）を反映していることが更に改良を重ね明らかになれば、今後さらに親や教師が質問紙からその子の発達特性を理解する際の手助けになるだろう。

今回の因子分析の検証は今後の改訂、標準化（平均、標準偏差の提供）に向けての第一歩となった。当面はオリジナル版で使用可能であると思われる。一方で、被験者に小学生が多く、今後、対象の年齢層を広げ母集団を増やして検証する必要があると思われる。今後、更に改訂版を開発していく必要がある。また、＜忘れる、失くす、気が散る＞という特徴をLDの因子にすることによって、AD特性レベルが低くなる点をどのようにするか、1つの質問項目に、2つの問い合わせを含んでいる点などを含め、質問表現を吟味して修正する必要があるだろう。質問項目の中にADとHDの区分、あるいはLDとの区分が曖昧なものが含まれている。このあたりを考慮して質問項目を若干見直し改訂版を作成していきたい。

参考文献

- 1) American Psychiatric Association (2000) : Diagnostic and statistical manual of mental disorders. 4th ed. TR (DSM-4-TR). Washington DC : American Psychiatric Association. 高橋三郎・大野裕・染谷俊幸（訳）(2002) : DSM-IV-TR 精神障害診断・統計マニュアル 医学書院.
- 2) American Psychiatric Association (2013) : Diagnostic and statistical manual of mental disorders. 5th ed. (DSM-5). Washington DC: American Psychiatric Association. 高橋三郎・大野裕(監訳) 染矢俊幸・神庭重信・高橋三郎・大野裕・染谷俊幸(訳) (2014) : 精神障害診断・統計マニュアル DSM-5 精神疾患の分類と診断の手引.日本精神神経学会. 医学書院.
- 3) Gilberg C. (2002) : Asperger's Syndrome-A Guide for Parents and Professionals. Cambridge University Press Wing L. (1996) : The Autistic Spectrum: a Guide for Parents and Professionals. Cambridge University Press.
- 4) 林知代(2012) : アスペルガー特性を持つクライアントへの多次元的バッテリーの組み方. 芦屋大学論叢 第 56 号 pp15-25 Stern D. (1985) : The Interpersonal World of the Infant: A View from Psychoanalysis and Developmental Psychology. New York: Basic Books, Inc.
- 5) 杉山登志郎・森則夫・岩田泰秀編(2014) : 臨床家の為の DSM-5 虎の巻. 日本評論社.
- 6) Sorden S.(1995) : Women with Attention Deficit Disorder. MS, MFCC.
- 7) Szatmari P. (1991) : Asperger's Syndrome: Diagnosis, Treatment, and Outcome. Psychiatr Clin North Am. 1991 Mar;14(1):81-93. Review.
- 8) World Health Organization (WHO) (1994) : ICD-10 the 10th revision of the International Statistical Classification of Diseases and Related Health Problems (ICD). American Medical Association. 中根允文／岡崎祐士／藤原妙子／中根秀之／針間博彦訳：(2008) ICD-10 精神および行動の障害.

付表1 オリジナル版と28項目版の対応（結果欄の数字は因子を示す）

No.	項目	28項目因子分析結果			備考
1	A D 注意欠陥・不注意性	ケアレスミスのために、能力に見合った結果が出せない。	3		
5		勉強や作業で、しまい忘れ、し忘れ、忘れ物、が多い。			LDIに負荷
9		話しかけているのにしばしば聞いていないように見える。			0.4未満
13		質問に対して早とちりや思い込みがある。	3		
17		内容を理解し、自分でもやる気はあるのに結果的に指示通りやり遂げられない。			LDIに負荷
21		物事を進めるとき、優先順位を考えるなど順序だてて考えられない。			0.4未満
25		努力を必要とする活動や、課題が続けられない。避ける。	1		
29		玩具や文房具をはじめ、活動に必要な持物を失くす。			LDIに負荷
33		外からの刺激に簡単に影響を受け注意をそらされる。気が散る。			LDIに負荷
37		覚えていて当然と思われることを悪意なく忘れる。明らかな事実を違う（明らか嘘を本当だ）と言い張る。	3		
2	H D 衝動性・多動性	すぐ手足をそわそわ動かしたり、体をもじもじする。	1		
6		年齢で期待される時間座っていられない。座っていることを要求される状況で席を離れる。	1		
10		不適切な状況で、走り回る。高いところに上る。飛び跳ねる。	1		
14		静かに余暇を過ごすことがない。過活動的である。	1		
18		新奇なものへ興味・関心を抱く。興味関心が次々と変わる。	1		
22		集団の中で必要以上にテンションが高い状態でしゃべり続けたり行動したりする。	3		
26		人が質問をする前や、質問が終わる前に出し抜けに発言する。	3		
30		順番を待つことに非常にストレスを感じる。	1		
34		人の会話やゲームに悪気なく干渉して流れを中断させる。	3		
38		整理整頓、片付けができない。	3		
3	A S 自閉症	じっと見つめすぎたり、視線がまったく合わなかったりする。			0.4未満
7		動作やジェスチャーが不器用でぎこちない。		4	
11		自他の感情がつかみにくい。感情が表情に出ない。		4	
15		友人は求めるが集団は嫌い。集団に疲れる。		4	
19		大勢の友だちより少数で深く付き合う。興味関心のものには、ひとりで没頭する。		4	
23		人の気持ちや意図がわからない。話に加わるタイミングが分からず。		4	
27		「なぜ」とよく言う。あたりまえと思われることをしつこく尋ねる（と言われる）。			ADIに負荷
31		日課や動作に決まりがある。融通が利かない。新しい変化になじむのに時間がかかる。		4	
35		数字や文字、絵画、音楽のいずれかもしくは複数に強い興味を示す。		4	
39		五感のいずれかもしくは複数、あるいは身体に過敏性がある。感覚が鋭い。			0.4未満
4	L D 学習障害	適切な速さで本が読めない。語句や行を抜かしたり、同じ行を何度も読む。	2		
8		思いつくままに話すなど、筋道の通った話し方をするのが難しい。			ASに負荷
12		文字を書くとき筆圧が強すぎたり弱すぎたりする。	2		
16		読みにくい文字を書く。	2		
20		文を書く時句読点がない。正しく句読点を打てない。	2		
24		量や時間の概念が分かりにくい。			LDとAS両方に負荷
28		知恵遅れでなく、簡単な計算に時間がかかる。計算の暗算ができない。	2		
32		言わされたことを文字にすることができない。黒板からノートへ書き写すのが困難だ。	2		
36		答えを出すのに自分流に偏る。			0.4未満
40		学年相応の文章題の意味を理解するのが難しい。	2		